

銅錢会事変

国枝史郎

青空文庫

女から切り出された別れ話

天明六年のことであった。老中筆頭はたぬまとのものかみ田沼主殿頭、横暴をきわめたものであった。時は全くはいたいき廃頹期に属し、下剋上の悪風潮が、あらゆる階級を毒していた。賄賂請託が横行し、物価が非常に高かった。武士も町人も奢侈おごりに耽った。初はつがつお鯉一尾に一両を投じた。上野山下、浅草境内、両国広小路、芝の久保町、こういう盛り場が繁昌した。吉原、品川、千住こつ、新宿、こういう悪所が繁昌した。で悪人が跋扈ばつこした。

その悪人の物語。――

梅が散り桜が咲いた。江戸は紅霞こうかに埋くずもれてしまった。鐘は上野か浅草か。紅霞の中からボーンと響く。こんな形容は既に古い。「鐘一つ売れぬ日はなし江戸の春」耽溺詩人きかく其角の句、まだこの方が精彩がある。とまれ江戸は湧き立っていた。人の葬式にさえ立ち騒ぐ、お祭りずきの江戸っ子であった。ましてや花が咲いたのであった。押すな押すなの人出であった。さあ江戸っ子よとんぼ鬮筋斗を切れ！ おっとおっと花道じゃあねえ。往来でだ、真ん中でだ。ワーツ、ワーツという景気であった。

その日情婦おんなから呼び出しが掛かった。若侍は出かけて行つた。

いつも決まって媾あいびき曳きをする、両国広小路を横へ逸それた、半太夫茶屋へ足を向けた。女は先刻から待つていた。

やがて酒肴が運び出され、愉快的酒宴が始められた。

そうだいつもならこの酒宴は、非常に愉快的酒宴なのであった。

この日に限つて愉快でなかつた。女の様子が変だからであつた。ろくろく物さえいわなかつた。下ばかり俯向うつむいていた。そうして時々溜息ため息をした。

「おかしいなあ、どうしたんだらう？」若侍は気に掛かつた。

と、女が切り出した。別れてくれというのであつた。

これには若侍も面食らつてしまった。で、しばらく黙もくつていた。

不快な沈黙が拡がった。

「ふふん、そうか、別れようというのか」こう若侍は洞うつろ声こゑで云つた。

「余儀無い訳わけがございまして……」

女の声も洞うつろであつた。

また沈黙が拡がった。

「別れるというなら別れましょう。だが理由わけが解らないではな」

「どうぞ訊かないでくださいまし」女は膝を手で撫でた。

「どうもおれにはわからない。藪から棒の話だからな」若侍は嘲けるようにいった。相手を嘲けるといふよりも、自分を嘲けるような声であった。「では今日が逢し終しまいか。ひどくさばさばした別れだな。いやその方がいいかもしれない。紋切り型で行く時は、泣いたり笑ったり手を取ったり、そうでなかったらお互いに、愛想吐づかしをいい合ったり、色々の道具立てが入るのだが、手数がかかり時間がかかりその上後に未練が残り、恨み合ったり憎んだり、詰まらないことをしなければならぬ。そういうことはおれは嫌いだ。いつそ別れるならこの方がいい。女の方から切り出され、あっさりそれを承知する。アツハツハツ新しいではないか」

決して厭味でいうのではなかった。それは顔色や眼色で知れた。本当にサラリとした心持ちから、そう若侍は言っているのであった。

「そうと話が決まったら、今日だけは気持ちよく飲ましてくれ」

若侍は盃を出した。女は俯向いて泣いていた。

「おや、どうしたのだ、泣いているではないか。おれは虐めた覚えはない。虐められたのはおれの方だ。虐めたお前が泣くなんて、どう考えても不合理だなあ」まさに唾然とした格好であつた。「ははあ解つた、こうなのだろう。あんまりおれが手つ取り早く、別れ話を諾きいたので、それでお前には飽あつけ気なく、やはり月並の別れのように、互いに泣き合おうというのだろう。だがそいつは少し古い。それもお前が娘なら、うん、初心うぶの娘なら、そういう別れ方もいいだろう。ところがお前は娘とはいえ、浅草で名高い銀杏茶屋いちやうのお色一枚絵にさえ描かれた女だ。男あしらいには慣れているはずだ。お止しよお止しよそんな古手はな。……おや、やつぱり泣いているね。いよいよ俺には解らなくなつた。ははあなるほど、こうなのだろう。あんまり気前よく承知したので、気味が悪いとでもいうのだろう。そこでいわゆる化粧泣き、そいつで機嫌を取り結び、後に祟りのないように、首尾よく別れようというのだろう。もしそうならおれは怒る！」

若侍は睨むようにした。

恋敵は田沼主殿頭

「というのは他でもない。おれとお前とは二年越し、馴染^{なじみ}を重ねた仲だのに、あんまり心持ちが判らなさ過ぎるからよ」いつている間にも若侍の顔には自嘲の色が浮かんでいた。

「アツハツハツハツ違うかな。いや違ったらご勘弁、こいつ器用に謝^{あや}まってしまう。とはいえそうでも取らなかつたら、他にとりようはないじゃあないか。二人の間にはこれといって、気^き不味^{まず}いこともなかつたのに別れ話を切り出され、しかも理由は訊くなという。ちよつと廻り気も起ころうつてもものさ」

じつと女の様子を見た。女は顔を上げなかつた。耳^{みみ}髻^{たぶ}がブルブル顫^{ふる}えていた。色がだんだん紅くなつた。バツチリ噛み切る歯音がした。鬢^{むす}の垂れ毛を噛み切つたらしい。

若侍は徳利を取つた。自分の盃へ注^つぎようとした。その手首を握るものがあつた。焰^もえるような女の手であつた。

「わたしは買われて行くのです」女は突然ぶつ付けるようにいった。「それをあなたは暢^の気^{んき}らしく、笑つてばかりおいでなさる」

「何、買われて行く？ 吉原へか？」

「女郎ならまだしもよござんす。妾^{めかけ}に買われて行くのです」

「うむ、そうして行く先は？」

「はい、あなたの大嫌いな方」

「おれには厭な奴が沢山ある。人間はみんな嫌いだともいえる」

「一人あるではございませんか。とりわけあなたの嫌いな人が」

「なに、一人？ うむ、いかにも。が、それは大物だ」

「そのお方でございます」

「老中筆頭田沼主殿頭！」

「はい、そうなのでございます」

「それをお前は承知したのか？」

「お養母かあさま様が大金を。……」

「うむ、田沼から受け取ったのだな？」

「妾わたしの何んにも知らないうちに。……用人とやらがやって来て。……」

若侍は立ち上がった。だがまたすぐに坐ってしまった。

「よくある奴だ。珍らしくもない。ふん。金持ちの権勢家、業突張ごうつくばりの水茶屋養母、その犠牲になる若い娘、その娘の情夫いろおとこ。ちゃんと筋立てが出来てらあ、物語の筋にある

奴よ。今までは草双紙で読んでいたが、今日身の上にめぐつて来たまでき。泣くな泣くな何を泣きやあがる」

翌日弓之助は軽装をして、三浦三崎へ出かけて行った。千五百石の安祥旗本、白旗小左衛門の次男であつて、その時年齢二十三、神道無意流の大先生戸ヶ崎熊太郎の秘蔵弟子で、まだ皆伝にはなつていなかったが、免許はどうに通り返していた。武骨かというに武骨ではなく、柔弱に見えるほどの優男やさおとこ。そうして風流才子であつた。彼は文学が非常に好きで、わけても万葉の和歌を愛した。で今度の三崎行も西行を気取つての歌行脚うたあんぎゃであつた。が、これは表おもてむき面おもてで、お色と別れた寂しさを、まぎらそうというのが真相であつた。途中で悠々一泊し、その翌日三崎へ着いた。半漁半農の三崎の宿は、人情も厚ければ風景もよかつた。小松屋というのへ宿まることにした。海に面した旅籠屋であつた。

「五、六日ご厄介になりますよ」「へえへえ、有難う存じます」

その翌日から弓之助は、懐中硯ふとこすりと綴り紙つづを持って、四辺あたりの風景を獵り廻あさつた。

銅銭会茶碗陣

しかしよい歌は出来なかつた。別れた女のことばかりが、胸のうちにこだわっていた。

もちろん女と別れたことも、彼には随分寂しかったが、その女を取った者が、田沼主殿頭だということが、一層彼には心外であつた。というのはほかでもない、彼の父なる小左衛門が、わずか式第の仕損しそこないから主殿頭に睨まれて役付いていた鍵奉行から、失脚させられたという事が、数カ月前にあつたからであつた。

「側御用人の小身から、將軍家に胡麻ごまを磨り老中にながつて七万七千石、それで政治の執り方といえば上をくらし下を搾取、ろくなことは一つもしない。憎い奴だ悪い奴だ」これが彼の心持ちであつた。

「一向三崎も面白くないな。どれそろそろ帰ろうか」

空の吟囊を胸に抱き、弓之助は江戸へ引つ返した。

最初の予定が五、六日、それを二日で切り上げたのであつた。

ある日弓之助は屋敷を出た。上野の方へ足を向けた。花の盛りは過ぎていたが、上野山

下は景氣立つていた。茶屋女が美しいので、近ごろ評判の一葉茶屋で、弓之助は喉を濡らすことにした。

女が渋茶を持つて来た。ふと見ると弓之助の正面に、一人の老武士が腰かけていた。雪白の髪を総髪に結んだ、無髻童顔むげんの威厳のある顔が、まず弓之助の眼を惹いた。左の眉毛の眉尻に、豌豆ほどの黒子ほくろがあった。

「はてな？」と弓之助は呟いた。武士の眼使いが変だからであつた。顔を正面に向けながら、瞳だけをそつと眼角へ送り、じつと何かを見ているのであつた。他人に気取られずに物を見る。——こういう見方で見ているのであつた。「これはおかしい」と思いながら、老人の瞳の向いている方へ、弓之助はこつそり眼をやつた。そつちに小座敷が出来ていた。そこに二人の町人がいた。その一人のやつている事が、弓之助の心をちよつとそそつた。茶飲み茶碗と土瓶とで、変な芸当をしているのであつた。茶碗の数は十個あつた。しかし土瓶は一個しかなかつた。その十個の茶飲み茶碗を、ある時はズラリと一列に並べある時はタラタラと二列に並べ、または方形にまたは弧形に、そうかと思うと向かい合わせたりした。そのつど土瓶の位置が変わつた。非常に手早くやるのであつた。いったい何をしているのだろうか？　そうやつて遊んでいるのだろうか？　座敷の隅で、チビチビ酒を飲んで

いた。見ているような見ていないような、不得要領な眼使いを一人の町人はして、茶碗の変化へ眼を付けていた。二人は懇意の仲とも見え、また全くの他人とも見えた。そういう不思議な茶碗の芸当が、しばらくの間繰り返された後、二人の町人は茶屋を出た。ややあつて老武士が編笠を冠かぶつた。

「銅銭会の茶碗陣」こう老武士は呟くようにいった。それから茶屋を出て行つた。

「銅銭会の茶碗陣」老人の言葉をなぞつて見たが、弓之助には意味がわからなかつた。しかし何んとなく心に掛かつた。意味を確かめて見たかつた。そこで老武士の後を追つた。

もうそれは夕暮れであつた。花見帰りの人々が、ふざけながら往來を練つていた。老武士はズンズン歩いていった。足は谷中へ向いていた。この時代の谷中辺はただ一面の田畑であつた。飛び飛びに藁葺わらぶきの百姓家があつた。ぼんやり春の月が出た。と一軒の屋敷があつた。大名方の控え屋敷と見え、数寄すきの中にも厳いめしい構え、黒板塀がめぐらしてあつた。裏門の潜戸くぐりがギーと開いた。老武士の姿が吸いこまれた。

「いったい誰の屋敷だろう？」ここまで尾行つて来た弓之助は、しばらく佇んで眺めやつた。少し離れて百姓家があつた。そこで弓之助は訊いて見た。

「大岡様のお屋敷でございますよ」

「ああそうか、大岡様のな」

弓之助は礼をいって足を返した。

「享保年間の名奉行、大岡越前守と来たひには、とても素晴らしい人傑だったが、子孫にはろくな物はないようだ。今の時代に大岡様がいたら、もっと市中は平和だろうに。……ナーニ案外駄目かもしれない。名君でなければ名臣を、活用することは出来ないからな。……それはそうと今の老人、大岡家のどういう人だろう？ 非常な老年と思われるが、歩き方など若者のようだ。家老や用人ではないらしい。途方もなく威厳があつたからな」

北町奉行曲淵甲斐守

彼の屋敷は本所にあつた。

「お帰り遊ばせ」と若党がいった。

「ああ」と受けて部屋へはいった。小間使いが茶を淹いれて持って来た。

「お父様は？」と弓之助は訊いた。

「はい、ご書見でございます」

「お兄様は？」と彼は訊いた。

「はい、ご書見でございます」

「みんな勉強しているのだな。何んのために勉強するのだろうか？ 論語を読んでどうなる

んだろう？ どこかの世界で役立つかしら？ どうもおれには疑問だよ。そんな事より行

儀でも習つて、頭の下げつ振りでも覚えるんだね。そうでなかったらほうかん幫間でも呼んで、

ついで追従術を習うんだね。こいつの方がすぐ役立たあ。お菊お前は思うな？」

「若旦那様何をおっしゃるやら、ホツホツホツホツ、そんな事」小間使いのお菊は無意味に笑った。

「ホツホツホツホツそんな事か？ なるほど、こいつも処世術だ。語尾をぼか暈して胡麻化し

てしまう。偉いぞお菊、その呼吸だ。みだいどころ御台所に成れるかもしれねえ。俺はお前の弟子に

なろう、ひとつ俺を仕込んでくれ」

「厭でございますよ、若旦那様」小間使いのお菊は逃げてしまった。

弓之助は寝ることにした。

「どぎった事はないものかしら？ ひっくり返るような大事件がよ。俺はそいつへ食い下

がつてゆきたい。何んだか知らねえがおれの心には変てこな塊かたまりが出来ている。ともかくもこいつを吐き出したいものだ。つまり溜飲りゅういんを下げるのさ」

北町奉行 曲淵まがりぶち甲斐守かいかみ、列代町奉行のその中うちでは、一流の中うちへ数えられる人物、弓之助にとつては叔父であつた。

その翌日のことであつた、弓之助は叔父を訪問した。屋敷内が騒がしかつた。与力が右往左往した。同心どもが出入りした。重大な事件でも起こつたらしい。弓之助は叔母の部屋へ行つた。

「叔母様、何か取り込みで？」

「おやこれは弓之助さんかい。何んだか妾わたしには解らないが、大変なことが起こつたようだよ」

弓之助には母がなかつた。五年ほど前に逝なくなつてしまつた。で、弓之助はこの叔母を、母のように、懐しんでいた。

「お茶でも淹いれよう、遊んでおいで。叔父さんも帰つて来ようからね」

「ええ有難うございます」

お茶を飲んで世間話をした。叔父は帰って来なかった。御殿へ詰め切りだということであつた。夜になってようやく帰つて来た。その顔色は蒼褪めていた。弓之助は叔父の部屋へ行つた。

「毎日ご苦労に存じます」

「おお弓之助か、近ごろどうだ」こうはいつたがいつものように、優しく扱かつてはくれなかつた。いわゆる心ここにあらず、何か全く別のことを、考えているような様子であつた。

「これは大事件に相違ない」弓之助は直覺した。「何か大事件でも起こりましたので」顔色を見い見い訊いて見た。

「うん」と甲斐守は物憂そうにいつた。「前古未曾有の大事件だ」

「いったいどんなことでございますな？」

「絶対秘密だ。いうことは出来ない」甲斐守は苦り切つた。

変な噂は聞かなかつたかな？

甲斐守は深沈大度、喜怒容易に色に出さぬ、代表的の役人であった。今度に限ってその甲斐守が、まざまざ憂色を面に現わし、前古未曾有の大事件で、絶対秘密というからには、よほどの事件に相違ない。弓之助の好奇心は膨れ上がった。しかし甲斐守の性質として、一旦いわぬといったからには、金輪際こんりんざい口を開かぬものと、諦めなければならなかった。そこで弓之助は一礼し、甲斐守の部屋を出ようとした。

「これ弓之助ちよつと待て、少し聞きたいことがある」甲斐守は急に止めた。

「はい、ご用でございますか」弓之助は座に直った。

「お前は随分道楽者で、盛り場や悪所を歩き廻るそうだな」

「おやおや何んだ、面白くもない。紋切り形の意見かい」弓之助は苦笑したが、

「これはどうも恐れ入ります。はい、さようでございませう。いくらかは道楽も致しますが、決して親や兄弟へは、迷惑などは掛けないつもりで」

「いやいや意見をするのではない。若いうちは遊ぶもよかろう。親父のようにかたくなでは、ろくな出世は出来ないからな。どうだ情婦おんなでも出来ているか」

「おやおやこいつは変梃へんていだぞ。妙な風向きになったものだ。叔父貴としては珍らしい。

ははあわかつた、手段だな。いわせて置いてとちめる。ううんこいつに相違ない。町奉行なんか叔父に持つと、油断も隙も出来やあしない。甥に対してさえお白洲式の、訊問法を採るのだからな。構うものか、逆捻さかねじを食わせろ」そこで弓之助はニヤニヤした。

「実はね、叔父さん、出来ましたので。茶汲み女ではありませんが、どうしてどうして一枚絵にさえ出た、素晴らしい別嬪でございますよ。だがね、叔父さん、つい最近、縁を切られてしまいました」

「切られたというのは変ではないか、お前が縁を切ったんだらう。冗むだなことをしたものだ」
「いいえそうじゃありません。女から引いんどう導を渡されたんで」

「ほほうそうか、それは偉い」

「偉い女でございますよ」

「いやいや偉いのはお前の方だ」

「叔父さん冷ひやかしちやあいけません」

「冷かすものか、本当のことだ。遊びもそこまで行かなければ、堂に入ったとはいわれな
い」

「振られて帰る果報者。叔父さん、こいつをいつているんですね」

「いやいやそれとは意味が異う。男へ引導を渡すような女だ、いずれ鉄火に相違あるまい。そういう女をとまかくも、占めたということは偉いではないか」

「これはどうも恐れ入りました」弓之助は変に気味悪くなつた。「この叔父貴変挺だぜ。金仏のような風采でいてそれで消息には通じている。ははあ昔は遊んだな」

その時甲斐守は一膝進めた。

「そこでお前に訊くことがある。盛り場ないし悪所などで近ごろ何か変わった噂を耳にしたことはなかつたかな？」

「さあ、変わった噂というと？」

「銅銭会というようなことを」

「あつ、それなら聞きました。いや現在見たんです」

「ふうむ、そうか、知っているのか。……ひとつそいつを話してくれ」ピタリと甲斐守は坐り直した。

そこで弓之助は昨日、上野山下一葉茶屋で、怪しい振る舞いをした町人のことと、老武士のことを物語つた。じつと聞いていた甲斐守は、一つ大きく頷いた。

「いやよいことを教えてくれた。ついでには弓之助頼みがある。これから大至急谷中へ行き、

大岡侯の下屋敷へ伺候し、その老体と面会し、もっと詳しく銅銭会のことを、聞き出して来てはくれまいかな」

「はい、よろしゅうございます。しかしはたしてその老人、会って話してくれましようか」
「俺から書面をつけることにしよう」

「へえ、それでは叔父様は、その老人をご存知で？」こう弓之助は不思議そうに訊いた。

銅銭会縁起録

「さよう」といったが曖昧あいまいであった。

「まず知っているとして置こう。あの老人は人物だ。徳川家の忠臣だ。しかし一面めしゆう囚い人どなのだ。同時に徳川家の客分でもある。捨扶持すてぶち五千石をくれているはずだ。まずこのくらいにして置こう。書面が出来た。すぐ行ってくれ」

「はい、よろしゅうございます」

書面の面には京師殿と、ただ三文字書かれてあった。

書面を持って飛び出した。ポンと備え付けの駕籠に乗った。

「急いでやれ！ 行く先は谷中！」

深夜ゆえに掛け声はない。駕籠は一散に宙を飛んだ。やがて大岡家の表門へ着いた。

トントントンと門を叩いた。「ご門番衆、ご門番衆」四方あたりを憚はばつて小声で呼んだ。

「かかる深夜に何用でござる」門の内から声がした。

「曲淵まがりぶち甲斐守かひのかみの使者でござる。ただし、私用、潜戸くぐりを開けられい」

で、潜戸がギーと開いた。それを潜つて玄関へかかった。

「頼む。頼む」と二声呼んだ。

と、小間使いが現われた。

「これを」と書面を差し出した。

一旦小間使いは引つ込んだが、再び現われると慇懃いんぎんにいった。「さ、お通り遊ばしま

せ」

十畳の部屋へ通された。間もなく現われたのは老人であった。

「白旗しらはたうし氏のご子息だそうで。弓之助殿と仰せられるかな。……書面の趣き承知致した。

しかし談話はなしでは意を尽くさぬ。書物があるによつてお持ちなされ」

懷中から写本を取り出した。

「愚老、研究、書き止め置いたもの、甲斐守殿へお見せくだされ。……さて次に弓之助殿、昨日は一葉茶屋で会いましたな」

「ご老人、それではご存知で？」

「さて、あの時の茶碗陣、この意味だけは本にはない。よって貴殿にお話し致す。——貴人横奪、かいもん槐門周章。ひのえ丙より壬、みずのえ一所集合、牙城を屠る。ほふ急々きゆうきゆう如律令。——つまりこういう意味でござった。甲斐守殿へお伝えくだされ」

「して、茶碗陣とおっしゃるは？」

「うむ、茶碗陣か、それはこうだ。銅銭会の会員が、茶碗と土瓶の位置の変化で、互いの意思を伝える法」

「火急の場合、これでご免」

「謹慎の身の上、お見送り致さぬ」

で弓之助は下屋敷を辞した。門を潜ると駕籠へ乗った。

駕籠は一散に宙を飛んだ。

間もなく甲斐守の屋敷へ着いた。門を潜り、玄関を抜け、叔父の部屋へ走り込んだ。

依然肩衣かたぎぬを着けたまま、甲斐守は坐っていた。

「おお弓之助か、どうであつた？」

「まずこれを」と書物かきものを出した。

「うむ、銅銭会縁起録」

「他に伝言ことづてでございます」

「うむ、そうか、どんなことだ？」

「先ほど、私お話し致しました、上野山下一葉茶屋で、一人の町人の行なつた茶碗芸についてでございますが、あれは銅銭会の茶碗陣と申し、茶碗の変化によりまして、会員同士互いの意思を、伝え合うところの方法だそうで、あの時の茶碗陣の意味はといえ、貴人横奪、槐門周章。丙ひのえより壬みずのえ、一所集合、牙城を屠る。急々如律令。……かような由にございます」

「ううむそうか、よく解つた」甲斐守はじつと考え込んだ。「……貴人横奪？ 貴人横奪？ これはこの通りだ間違いない。いかにも貴人が横奪された。槐門周章？ 槐門周章？ 槐門あというのは宰相の別名、当今の宰相は田沼殿、いかにもさよう田沼殿は、非常に周章わてておいでになる。だからこれにも間違いはない。丙より壬？ 丙より壬？ これがち

よつと解らない」甲斐守は眼を閉じた。すると弓之助が何気なくいった。

「日柄のことではございませんな。たしか一昨日おとつが丙の日で」

將軍家治誘拐さる

「おつ、なるほど、そうかもしれない。うむ、よいことを教えてくれた。いかにもこれは日柄のことだ丙から壬というからには、丙から数えて壬の日まで、すなわち七日間という意味だ。一所集合？ 一所集合？ これは読んで字のごとく某所へ集まれということだろう？ 牙城を屠る？ 牙城を屠る？ 敵の本陣をつくという意味だ。急急如律令は添え言葉、たいして意味はないらしい……さてこれで字義は解った。貴人を横取りしたために、宰相田沼殿が周章あわでている。七日の間に某所へ集まり、敵の本陣を突くという意味だ」

甲斐守は沈吟した。

「解ったようで解らない。だがともかくも今度の事件が、銅銭会という秘密結社の、会員の所業しわざであることは、どっちみち疑がいはなさそうだ」

「叔父様」と弓之助は窺うように、「貴人とおっしゃるのはどなたのことですか？」

甲斐守はジロリと見た。

「これはな、天下の一大事だ。本来ならば話すことは出来ぬ。これが世間へ知れようものなら、忽ち謀叛が起ころう。が、お前には功がある。特別をもって話して聞かせる。

貴人というのは將軍家のことだ」

「えっ！」と弓之助は眼を睜みはつた。「それでは上様が何者か？」

「一昨日の晩、盗み取られた」

「へえ」といったが弓之助は二の句を継ぐことが出来なかった。

時の將軍家は家治いはえるであった。九代將軍家重の長子で、この事件の起こった時には、その年齢五十歳、普通の日本の歴史からいえば、暗愚の将となっている。しかしそうばかりでもなかったらしい。ただ余りに女性的で権臣を取って抑えることが出来ず、権臣のいうままになつていたらしい。少しも下情かじように通じなかった。権臣がそれを遮さへぎるからであった。彼は日本の国は、泰平のものと思つていた。彼は性、画を好んだ。そこで権臣は絵師を進め、彼をしてそれにばかり没頭せしめた。

しかるに最近事件が起こった。近習山村彦太郎が、三河風土記を講読した。すると家治は慨嘆した。「俺は今までこんない本が、世間にあるとは思わなかった。もつと彦太郎読んでくれ」

そこで彦太郎は陸^{りくぞく}続と読んだ。それを怒ったのが権臣であった。すなわち田沼主殿頭であった。すぐ彦太郎を退けてしまった。

しかし將軍家はそれ以来大分心が変わったらしい。やや田沼を疎^{うと}むようになった。そうして下情に通じようとした。田沼はそれを遮ろうとした。しかし將軍は子供ではなかった。一旦覚えた智恵の味を忘れることは出来なかった。で將軍家と田沼との間が、どうも円滑に行かなくなった。五日ほど以前^{まえ}のことであった。田沼は將軍家をそのかし、上野へ微行で花見に行った、その帰り路のことであった。本郷の通りへ差しかかった。忽ち小柄が飛んで来た。が、幸い駕籠^{あた}へ中^{あた}つた。小柄には毒が塗つてあった。そうして柄には彫^{ほり}刻^りがあった。銅銭会と彫られてあった。

こうして一昨日の夜となった。その夜將軍家は近習も連れず、一人後苑^{こうえん}を彷徨^{さまよ}っていた。と、一人の非常な美人が、突然前へ現われた。見たことのない美人であった。大奥の女でないことは、その女の風俗で知れた。町娘風の振り袖姿、髪は島田に取り上げていた。

女は先に立つて歩いて行つた。將軍家は後を追つた。近習の一人がそれを見付け、すぐ後を追つかけた。御天主台と大奥との間、そこまで行くと二人の姿が——すなわち將軍家と女とが、掻き消すように消えてしまった、爾来消息がないのであつた。

弓之助感慨に耽る

甲斐守はこう語つた。

弓之助は奇異の思いがした。

「これは陰謀でございますな。狐狸の所業しわざではありませんな。怪しいのはその女で、何者かの傀儡かいらいではございませうか？」

「うん俺もそう思う。振り袖姿のその女は、銅銭会の会員だろう」

「申すまでもありません。しかし私は銅銭会より、銅銭会をあやつっているある大きな人物が……」

「これ」と甲斐守は手で抑えた。「お前、田沼殿を疑がつているね」

「勢いそうなるではございませんか」

「が、ここに不思議なことには、今度の事件では田沼殿は、心の底から周章あわてていられる」
「さては芝居がお上手と見える」

「いやおれの奉行眼から見ても、殿の周章あわて方は本物だ。そこがおれには腑はらに落ちないのだ。……さて、よい物が手に入った。銅銭会縁起録、早速これから御殿へまいり、老中方面にお眼まなこに掛けよう」

叔父の家を出た弓之助は、寂然しんと更けた深夜の江戸を屋敷の方へ帰って行つた。考えざるを得なかつた。

「田沼の所業に相違ない。將軍家に疎うとんぜられた。そこで將軍家をおびき出し、幽囚ゆうしたか殺したか、どうかしたに相違ない。悪い奴だ、不忠者め！ その上俺の情婦おんなを取り、うまいことをしやがつた。

公おおやけの讐あだ、私の敵あだ、どうかしてとつちめてやりたいものだ。だが、どうにも証拠がない。

是非とも証拠を握らなければならぬ。銅銭会とは何物だろう？ 支那の結社だということだが、どういう性質の結社だろう？ だがそいつは縁起録を見たら、容易に知ることが出来るかもしれない。明日もう一度叔父貴を訪ね、縁起録の内容を知らせて貰おう。とま

れ田沼めと銅銭会とは、関係があるに相違ない。あるともあるとも大ありだ。銅銭会員を利用して、將軍家誘殺を試みたのだ。無理に將軍家を花見に誘い、毒塗り小柄で討ち取ろうとした。ところがそいつが失敗しくじったので、会員中の美人を利用し、大奥の庭へ入りこませ好色の將軍家を誘い出したのだ。容易なことでは大奥などへは、地下じげの女はいれないが、そこは田沼がついている。忍び込ませたに相違ない。だがしかし不思議だなあ。突然消えたというのだから」

彼はブラブラ歩いて行つた。

「田沼にいかにも権勢があつても、深夜城門を開くことは、どんなことがあつても出来るものではない。だが城門を開かなかつたら、城から外へ出ることは出来ない。それなのに突然消えたという。どうもこいつがわからないなあ」

弓之助には不思議であつた。

「もしかすると將軍家には、千代田城内のどの部屋かに、隠されているのではあるまいかな？ お城には部屋が沢山ある。秘密の部屋だつてあるだろう。どこかに隠されてはいないかな？」

神田を過ぎて下谷へ出た。

朧おぼろづき月

が空にかかっていた。

四辺あたり

が白絹でも張つたように、

微妙な色に暈かされていた。

「山村彦太郎が将軍家へ、風土記を講読したというが、結講な試みをしたものだ。そのため将軍家の眩まされた眼が、少しでも明いたということは、非常な成功といわなければならぬ。もつとも今度の大事件の、そもそもその発端というものは、その三河風土記の講読にあることは争われないが、決してそれを責めることは出来ない、聞けば山村彦太郎は、賢人松平越中守様に、私淑しているということだが、ひよつとかすると越中守様の、何んとはなしの指金さしがねによりて、そんなことをしたのではあるまいかな」

弓之助の社会観

弓之助は上野へ差しかかった。

「越中守はお偉い方だ。ああいう方が廟堂に立ち、政治をとつてくだされたなら、日本の国も救われるのだが、そういう事も出来ないかして、いまだに枢機すうきに列せられない。現代政治のとり方は、庚申堂こうしんどうに建ててある、三猿の石碑いしふみそっくりだ。見ざる聞かざるいわ

閉ざされていた。屋根が水でも浴びたように、銀鼠色に光っていた。巨大な公孫樹いちようが立っていた。その根もとに茶店があった。すなわちお色の住居いえであった。犬が門を守っていた。と尾を振って走って来た。よく見慣れている弓之助だからで、懐しそうにじやれついた。

「おおよしよし」と頭を撫でた。「犬の方がよっぽど人間らしい。さて何かやりたいが、小判をやってもし方がねえ。その他には何んにもないお気の毒だがくれることは出来ねえ。……お色め、今ごろいい気持ちで、グツスリ眠っているだろう。そう思うといい気持ちはしねえ。間もなく田沼の皺くちや爺に、乳房を自由にされるんだろう。こいつは一層いい気持ちだしねえ。だがひよつとするとおれの事を案じて眼覚めているかもしれないねえ。こいつはちよつといい気持ちだ。まずなるたけならいい方へ考えた方がよさそうだ。少なくとも気休めにはなるからな」

観音堂の裏手へ廻った。花川戸の方へ歩いて行った。どこもかしこも寝静まっていた。家々がまるで廃墟のように見えた。隅田に添って兩國の方へ歩いた。一方は大河一方は家並、その家並が一所切れてこんもりとした森があった。社やしろでも祀つてあるらしい。

「どれ、神様でも拜むとするか」森の中へはいつて行った。はたして社が祀つてあった。その拜殿へ腰を掛けた。一つ大きく呼吸いきづいた。もう一度大きく呼吸いきづこうとした。中途

で彼は止めてしまった。

「實際現代は息苦しい。重い石が冠さっている。勇気のある者は憤いきどおり怒をもつて、その重い石を刎ね退けるがいい。勇気のある者は笑つてはいけない！ 肉体的にいう時は、笑つたとたんに筋が弛む。精神的にいう時は、笑つたとたんに心が弛む。弛むということは油断ということだ。その油断に付け込んで飛び込んで来るのが、妥協性だ。妥協、うやむや、去勢、萎縮、そこで小粋な姿なりをして、天下は泰平でございませう。浮世は結構でございませう。皆さん愉快にやりませう。粋おつでげすな。大通でげすな。なあアんで事になつてしまふ。そうやって謳うたっているうちに、それよこせやれよこせ、洗いざらい持つて行かれる。へッへッへッへッへッこれはこれは、いつの間に貧乏になつたんだらう？ などと驚いても追つ付かない。だから決して笑つてはいけない。いつもうんと怒っているがいい。……だがこいつは勇士の態度だ。利口者には別の道がある。行儀作法を覚えることよ。お辞儀を上手にすることよ。お太鼓をうまく叩くことよ。お手拍子喝采を習うことよ。それで権勢家に取り入るのよ。そうして重用されるのよ。さてそれからジワジワと、自分の考えは権勢家に伝え、その権勢家の力を藉かりて、もつて実行に現わすのよ」

また感慨に耽り出した。

昇ぎ込まれた一丁の駕籠

と、その時一丁の駕籠が、森の中へ担ぎ込まれた。

「こんな深夜にこんな所へ、担ぎ込まれるとは不思議千万、何か様子があるらしい」弓之助は社の背後うしろへ隠れた。

「おお先棒もうよかろう」「おつと合点、さあ下ろせ」

駕昇さききはトンと駕籠を下ろした。それから額の汗を拭いた。それからヒソヒソと囁ささやき合つた。

「おい姐ねえさん、用があるんだ、ちよつくら駕籠から出ておくんなせえ」後棒の方がこういつた。

「あい」と可愛らしい声が出た。「もう着いたのでございますか」中から垂れが上げられた。「おやここは森の中、駕昇さききさん、厭いやですねえ。気味が悪いじゃありませんか。どうぞ冗談冗談なさらずに着ける所へ着けておくんなさい」言葉の調子が町娘らしい。

「まあ姐さん、急なさんな。着ける所は眼の先だ。がその前にご相談、厭でも諾いて貰わなけりやあならねえ」こういったのは先棒であった。「おお後棒、もうよかろう。お前からじつくりいい聞かせてやんねえ」両膝を立ててうずくまり、腰の辺りを探ったのは、煙管でも取り出そうとするのだろう。

先棒は及び腰をして覗き込んだ。

「のう姐さん、もうおおかた、見当は着いているだろう。いかにも俺らは駕舁きだ。が、問屋場に腰掛けていて、いちいちお客様のお出でを待つて、飛び出すような玉じゃあねえ。もうちつとばかり荒つぽい方だ。俺らは石地藏の六といい、仲間は土鼠の源太とって、大した悪事もやらねえが、コソコソ泥棒、搔つ払い、誘拐しぐらいはやろうつてものさ、さてそこでお前さんだが、品川から駕籠に乗んなすつた時おりから深夜、女身一人、出歩こうとは大胆だが情夫に愛したいの一心から、家を抜け出して来たんだな、こう目星を付けたつてものさ。で、先棒がいう事には、何も男の所まで、担いで行くにやああたるめえ、大の男が二人まで、ここに揃っているのだからな。なるほど縹緞は悪かろう、肌だつて荒いに違えねえ。いうまでもなく情夫の方が、やんわりと当るに違えねえ。だがそいつあ勘弁して貰い、厭でもあろうが俺ら二人を、亭主に持つてはくれまいか、ちよつくら相談

ぶつて見ようてな。もつとも厭だといったところでおいそれと、聞く俺らじゃあねえ。よくねえ奴らに魅入られたと、こう思つて器用に往生しねえ」

「おおお六やどうしたものだ。そう強^{こわもて}面に嚇^{おど}すものじゃねえ。相手は娘だジワジワとやんな」先棒の源太はかがんだまま、駕籠の中を覗き込んだ。

「ナアー二姐さん心配しなさんな。外見はちよつと恐^{こわ}らしいが、これも案外親切ものでね。お前さんさえ諾^{うん}といつたらそれこそ二人で可愛がつて、堪能させるのは受け合いだ。が二人とも飽きつぽいんで、さんざつぱら可愛がつたそのあげくには、千住^{こっ}か、品川か、新宿で、稼いで貰わなけりやあならねえかも知れねえ。だがマアそいつは後のことだ。差し詰めここで決めてえのは、素直に俺らの女房になるか、それとも強情に首を振るか、二つに一つだ。返辞をしねえ」

駕籠の中からは返辞がなかった。どうやら顛えてでもいるらしい。と、ようやく声がした。

「まあそれじゃああなた方は、悪いお方でござんしたか」

振り袖姿に島田鬻

「さあね、大して善人じゃあねえ。だがこいつもご時世のためだ。こんな事でもしなかつたら、酒も飲めず、魚も食えず、美婦も自由にやあ出来ねえつものよ。恨むなら田沼様を恨むがいい」

「厭だと妾が首を振つたら？」 「二人で手籠めにするばかりさ」 「もしも妾が声を立てたら？」 「猿轡をはめちまう。だがもし下手にジタバタすると、喉笛に手先がかかるかもしれないねえ。そうなつたらお陀仏だ」 「それじゃあ妾は殺されるの？」 「可哀そうだがその辺だ」 「死んじやあ随分つまらないわね」 「あたりめえだあ、何をいやがる」

女の声はここで途絶えた。

「それじゃあ妾はどんなことをしても、遁がれることは出来ないんだね。仕方がないから自由になろうよ」

「へえ、そうかい、こいつあ偉い。ひどく判りのいい姐さんだ」

「だがねえ」と女の声がした。「見ればあなた方はお二人さん、妾の体はただ一つ、二人の亭主を持つなんて、いくら何んでも恥ずかしいよ。どうぞ二人で籤でも引いて、勝った

方へ、体をまかせようじゃないか」

「なるほどなあ、こいつ無理だ。六ヤイ手前どう思う」

「そうよなあ」と気のない声で「俺らおいがきつと勝つのなら、籤せんを引いてもよいけれどな」

「そいつあこつちでいうことだ。おいどうする引くか厭か？」「どうも仕方がねえ引くとしよう。せつかく姐さんのいうことだ。逆らつちやあ悪かろう」「よしそれじゃあ松葉まつばく籤じだ。長い松葉を引いた方が姐さんの花婿とこう決めよう」

源太は頭上へ手を延ばし、松の枝から葉を抜いた。

「さあ出来た。引いたり引いたり」「で、どちらが長いんだい？」「冗談いうな、あたぼうめ、そいつを教えるなるものか。ふふん、そうよなあ、こつちかも知れねえ」「へん、その手に乗るものか。こいつだ、こいつに違えねえ」

六蔵は松葉をヒョイと抜いた。

「あつ、いけねえ、短けえや！」

「だからよ、いわねえ事じやねえ、こつちを引けといつたんだ」

源太は駕籠へ飛びかかった。「おお姐さん、婿は決まった」駕籠へ腕を差し込んだ。

「恥ずかしがるにやあ及ばねえ、ニツコリ笑つて出て来ねえ」

グイと引いた手に連れて、若い娘がヨロヨロと出た。頭上を蔽うた森の木の梢をもち、月が射した。板高く結った島田髷、それに懸けられた金きん奴やつこ、頸細く肩低く、腰の辺りは煙つていた。紅べにいろ色勝った振り袖が、ぼつたりと地へ垂れそうであった。

「可愛いねえ、お前さんかえ、源さんや。花婿や」キリキリと腕を首へ巻いた。「さあ行こうよ、お宿へね」源太をグイと引き付けた。

「痛え痛え恐ろしい力だ。まあ待つてくれ、呼吸いきが詰まる」源太は手足をバタバタさせた。「意気地いくじがないねえ、どうしたんだよ。やわい」は底本では「どうしたんだよ。やわい」じゃあないかえ、お前さんの体は。ホツ、ホツ、ホツ、ホツ、手頼たよりないねえ」源太の首へ巻いた手を、グーツと胸へ引き寄せた。

「む——」と源太は唸つたが、ビリビリと手足を瘻けいれん攣れんさせた。と、グンニヤリと首を垂れた。

手を放し、足を上げ、ポンと娘は源太を蹴った。一団の火焰の燃え立つたのは、脛に纏つた緋けだの蹴出けだしだ。

「化物ばけものだあア！」と叫ぶ声があった。石地藏の六が叫んだのであった。

息杖を握ると飛び込んで来た。と、娘は入り身になり、六蔵の右腕をひつ掴んだ。と、

カバリと息杖が落ちた。「ワ——ツ」と六蔵は悲鳴を上げた。とたんにドンと地響きがあった。六蔵の体が地の上へ潰された蟻がまのようにへたばった。寂然しんと後は静かであった。常夜燈の灯がまばたいた。ギー、ギーと櫓を漕ぐ音が、河の方から聞こえて来た。

怪しの家怪しの人々

クルリと娘は拝殿へ向いた。ポンポンと二つ柏かしわ手を打った。それからしとやかに棲つまを取った。と、境内を出て行った。

社の蔭に身を隠し、様子を見ていた弓之助は、胆を潰さざるを、得なかった。

「素晴らしい女もあるものだ。どういう素性の女だろう？ ……待てよ、島田に大振り袖！ ……ううむ、何んだか思いあたるなあ。一番後を尾行つけて見よう」

数間を隔てて後を追った。浅草河岸を花川戸の方へ、引つ返さざるを得なかった。女はズンズン歩いて行った。月の光を避けるように、家の軒下を伝って歩いた。遠くで犬が吠えていた。人の子一人通らなかつた。隅田川から灰ほのしろ白い物が、一団ムラムラと飛び上が

った。が、すぐ水面へ消えてしまった。それは鷗かもめの群れらしかった。女は急に立ち止まった。そこに一軒の屋敷があった。グルリと黒塀くろゑが取りまいていた。一本の八重桜の老木が、門の内側から塀越しに、往来の方へ差し出していた。満開の花は綿わたのように白く団々かたと塊かたまっていた。女は前後を見廻した。つと弓之助は家蔭いえかげに隠れた。女は門の潜り戸へ、ピツタリ身体をくつ付けた。それから指先で戸を叩いた。と、中から声がした。

「おい誰だ。名なを宣のたまれ」

「俺だよ、俺だよ、勘助だよ」

「うむそうか、女勘助か」

ギ——と潜り戸があけられた。女の姿は吸い込まれた。八重桜の花がポタポタと散った。弓之助は思わず首を傾かしげた。「何んとかいっただけな、女勘助? ……では有名な賊ではないか」

その時往來の反対むこうの方から、一つの人影が近付いて来た。月光が肩にこぼれていた。浪士風の大男であった。大おお髻わたぶきに黒紋付き、袴無しの着流しであった。しずしずこつちへ近寄って来た。例の家の前まで来た。と、潜り戸へ体を寄せた。それから指でトントンと叩いた。

「何人でござるな、お宣なのりください」すぐに中から声が出た。

「紫むらさきひも 紐 丹左衛門」

すると潜り戸がギーと開いた。浪士の姿は中へ消えた。同時に潜り戸が閉ざされた。

とまた一つの人影が、ポツツリ月光に浮き出した。博徒風の小男であった。心持ち前へ首を傾げ、足先を見ながら歩いて来た。急に人影は立ち止まった。例の屋敷の門前であった。ツと人影は潜り戸へ寄った。同じことが繰り返された。指先で潜り戸をトントンと打った。

「誰だ誰だ、名をいいねえ」

「新助だよ、早く開けろ」

「稲葉の兄貴か、はいりねえ」

潜り戸が開き人影が消え、ふたたび潜り戸がとぎされた。

その後はしばらく静かであった。

またもその時足音がした。足駄わらじと草鞋わらじとの音であった。忽ち二つの人影が、弓之助の前へ現われた。その一人は旅僧であった。手て甲こう、脚きゃ絆はん、阿弥陀あみだがさ笠がさ、ずんぐりと肥えた大坊主であった。もう一人の方は六部であった。負おい蔓ずるを背中にしよっていた。白の行衣を

纏っていた。一本歯の足駄を穿いていた。弓之助の前を通り過ぎ、例の屋敷の門前まで行った。ちよつと二人は囁き合った。ツと旅僧が潜り戸へ寄った。指でトントンと戸を打った。すぐに中から声がした。

「かかる深夜に何人でござるな？」

「鼠小僧外伝だよ」

つづいて六部が忍ぶようにいった。

「俺はひぼしちやしまる火柱夜叉丸だ」

例によつて潜り戸が、ギ——と開いた。二人の姿は吸い込まれた。ゴトンと鈍い音がした。どうやらかんぬき門を下ろしたらしい。サラサラサラと風が渡った。ポタポタと八重桜の花が落ちた。そのほかには音もなかった。

ガラガラと飛び出した四筋の鎖

闇に佇んだ弓之助は、考え込まざるを得なかった。「女勘助、紫紐丹左衛門、稲葉小僧

新助、火柱夜叉丸、それからもう一人鼠小僧外伝、これへ神道徳次郎を入れれば、江戸市中から東海道、京大坂まで名に響いた、いわゆる天明の六人男だ。ううむ偉い者が集まつたぞ。ははあそれではこの屋敷は、彼奴らきやつ盗賊の集会所だな。いやよいことを嗅ぎ付けた。叔父へ早速知らせせてやろう。一網打尽、根断やしにしてやれ」

スルスルと彼は家蔭を出た。

「いやいや待て待て、考え物だ。これから叔父貴の屋敷へ行き、事情を語っているうちに、夜が明けて朝になる。せつかくの獲物が逃げようもしれぬ。逃がしてしまつてはもつたない。ちよつとこいつは困つたなあ」彼ははたと当惑した。

「気にかかるとは女勘助だ。島田鬻に大振り袖、美人の装いをしていたが、大奥の後苑へ現われて、上様を誘拐したという、その女も島田鬻、振り袖姿だということである。……つながら関係があるのではあるまいかな？ ……いやいよ此奴こやつは逃がせねえ。うむそうだ踏み込んでやろう。なうて有名の悪漢わるものであろうとも、たかの知れた盗賊だ。掛かつて来たら切つて捨て、女勘助一人だけでも、是非とも手擒てとりにしてやろう」

彼は剣道には自信があつた。それに彼は冒険児であつた。胸に出来ている塊かたまりを、吐き出したという願いもあつた。どぎつた事をやってみたい。こういう望みも持っていた。

彼は潜り戸へ身を寄せた。それから彼らの真似をして、指でトントンと戸を打った。中は森閑と静かであった。人のいるような氣勢もなかった。彼は塀へ手を掛けた。ヒラリと上へ飛び上がった。腹這いになって窺った。眼の下に小広い前庭にわがあり、植え込みが飛びに出来ていた。その奥の方に主屋があった。どこにも人影は見えなかった。で弓之助は飛び下りた。植え込みの蔭へ身を隠し、さらに様子を窺った。やはりさらに人氣ひとけはなかった。玄関の方へ寄つて行つた。戸の合わせ目へ耳をあて、家内の様子を窺つた。無住の寺のように寂しかった。試みに片戸を引いてみた。意外にも、スルリと横へ開いた。「これは」と弓之助は吃驚びっくりした。「いやこれはありそうなことだ。泥棒の巣窟すみかへ泥棒が忍び込む気遣いはないからな、それで用心しないのだろう」彼は中へはいつて行つた。玄関の間は六畳らしく燈火ともしびがないので暗かった。隣室と仕切つた襖があった。その襖へ体を付けた。それからソロソロと引き開けた。その部屋もやはり暗かった。十畳あまりの部屋らしかつた。隣室と仕切つた襖があった。その襖をソロソロと開けた。燈火ともしびがなくて暗かつた。全体が手広い屋敷らしかつた。しかも人影は皆無であつた。どの部屋にも燈火がなかつた。一つの部屋の障子を開けた。そこに一筋の廻廊があつた。その突きあたりに別軒べつむがあつた。離れ座敷に相違ない。廻廊伝いにそつちへ行つた。雨戸がピツタリ締まつ

ていた。その雨戸をそつと開けた。灰ほのあか明るい十畳の部屋があつた。隣り部屋から漏れる燈が部屋を明るくしているのであつた。弓之助はその部屋へはいった。隣り部屋の様子を窺つた。やはり誰もいないらしい。思い切つて襖を開けた。はたして人はいなかつた。机が一脚置いてあつた。そうしてその上に紙があつた。紙には文字が記されてあつた。

川せんだいていしゆ大丁首

こう書いてあつた。

「はてな、どういう意味だろう？」

で、弓之助は首を傾げた。突然ガチャンと音がした。部屋の片隅の柱の中から、鎖が一筋弧を描き弓之助の方へ飛んで来た。右手を上げて打ち払つた。キリキリと手首へまきついた。「しまった！」と呻いたそのとたん、反対側の部屋の隅、その柱の中央から、まともや鎖が飛び出して来た。キリキリと左手へまきついた。まともや鎖の音がした。もう一本の柱から、同じように鎖が飛び出して来た。それが弓之助の胸をまいた。ともう一本の柱から、まともや鎖が飛び出して来た。それが弓之助の足をまいた。四筋の鎖にまき縮すく

められ、弓之助はバツタリ畳へ仆れた。身動きすることさえ出来なかった。

だが屋敷内は静かであった。咳しわぶき一つ聞こえなかった。行燈あんどんの燈ひは光の輪を、天井へボンヤリ投げていた。どうやら風が出たらしい、裏庭で木の揺れる音がした。……いつまで経っても静かであった。人の出て来る氣勢もなかった。

「どうもこいつは驚いたなあ」心が静まるに従って、弓之助の心は自嘲的になった。「人間を相手に切り合うなら、こんな不覚は取らないのだが、鎖を相手じゃあ仕方がない。……これは何んという戦法だろう？ とにかくうまいことを考えついたものだ。敵ながらも感心感心。……と行って感心していると、どんな酷ひどい目に合うかもしれない。さてこれからどうしたものだ。どうかして鎖を解きたいものだ」

彼は体をうね蛇らせた。鎖が肉へ食い込んだ。

恋文を書く銀杏茶屋のお色

「痛え痛え、おお痛え。滅多に体は動かさねえ。莫迦にしていらあ、何んということだ。」

仕方がねえから穩おとしくしていよう。……だがそれにしても泥棒どもは、どこに何をしてい
るのだろうか？ 姿を見せないとは皮肉じやあないか。ひどく薄っ気味が悪いなあ。これじ
やあどうも喧嘩にもならねえ。……考えたつて仕方がねえ。もがくとかえつてひどい目を
見る。おちついて待つより仕方がねえ、うんそうだ、こんな時には、何かで心を紛らせる
がいい。紙に書かれた『川大丁首』よしこの意味を解いてやろう」そこで彼は考え出した。
だがどうにもわからなかった。「こんな熟字つてあるものじゃねえ。川は川だし大は大き。
丁は丁だし首は首だ。音で読めば川せんだい大たい丁てい首しゆ。川大にして丁わかものの首？ こう読んだつて始
まらねえ。……こいつ恐らく隠語なんだろう」

依然屋敷は静かであった。

銀杏茶屋のお色は奥の部屋で、袖垣をして恋文ふみを書いていた。まだ春の日は午前であつ
た。店の客も少なかった。部屋の中は明るかった。春陽が丸窓へ射していた。小鳥の影が
二三度映つた。彼女は大分ご機嫌であつた。顔の紐が解けていた。頬にこつぽりした笑えくぼ
が出来るうっかり指で突こうものなら指先が嵌はまり込んで抜けそうもなかった。彼女はひど
く嬉しいのであつた。千代田城中に大事件が起こり、田沼主殿頭が狼狽し、お色めかけを妾めかけにす

ることなど、とても出来まいということ——もちろんハッキリといたたのではないが、とにかくそういう意味のことを、田沼の家の用人から、今朝方知らせがあったからであったのみならず、養母に渡したところの、手附けの金は手附け流れ、返すに及ばぬということであった。で、養母もご機嫌であった。そこでお色はこの事情を、恋しい男の弓之助へ告げ、今日いつもの半太夫茶屋で、逢おうと巧たくんでいたのであった。

「恋しい恋しい」という文字や「嬉しい嬉しい」という文字も、目茶目茶に恋ふみ文へ書き込んだ。

「あらあらかしく、お色より、恋しい恋しい弓様へ」こう結んで筆を置いた。封筒へ入れて封じ目をし、さも大事そうに懐ふところ中へ入れた。それから他よそ行きの衣裳を着、それから店へ出て行った。

「ちよつとお母さん出て来てよ」

「さあさあどこへなといらつしやい」長火鉢の前へ片膝を立て、お誂え通りの長煙管たばこを喫ふかしていた養母のお兼かねは、黒い齒莖かみで笑ってみせた。「おやおや大変おめかしだね。

ふふん、さてはあの人と……」

「いらざるお世話、よござんすよ」

「観音様へ参詣しお賽銭ぐらいは上げるだろうね」

「おや、そいつは本当だね」

いい捨ててお色は戸外へ出た。ブーツと春風が鬢を吹いた。で彼女は鬢を押さえた。プーッと春風が裾を吹いた。今度は前を抑えなければならぬ。「風さえ妾を蹴つてゐるよ」彼女はそこでニツコリとした。鳩がポツポと啼いていた。彼女の周囲へ集まつて来た。

「厭だねえこの鳩は、邪魔じやないか歩くのにさ」

御堂の前で掌を合わせた。帯の間から銭入れを抜き、賽銭箱へお宝を投げた。

「どうも有難う、観音様。みんなあなたのご利益よ」

で彼女は歩いて行つた。

「何て今日はいいい日なんだろう。みんな妾に笑いかけているよ。何だか知らないが有難う

よ」

往來の人が囁き合つた。

「あれが評判のお色だよ」「どうでえどうでえ綺麗だなあ」「今日は取りわけ美しいぜ」

「はいはい皆さん有難うよ」彼女は笑つて口の中でいった。

「でもね、皆さんお生憎さまよ、見せる人はほかにあるんですよ」

逢つてくれない弓之助

走り使いの喜介の家は、二丁目の露路の奥にあつた。お色は煤けた格子戸を開けた。

「ちよいと喜介どん、頼まれて頂戴」

菊石面あばたづらの四十男、喜介がヒヨイと顔を出した。「へいへいこれはお色さん」

「これをね」とお色は恋文ふみを出した。「いつもの方の所へね。……これが駕籠賃、これが
使い賃、これが向こうのお屋敷の、若党さんへの心付け」

「これはこれはいつもながら。……お気の付くことでございます。……そこで益 ご繁昌」
「冗むだをいわずと早くおいでな」

喜介は門を飛び出した。お色は両国を渡つて行つた。「春の海終日ひねもすのたりのたり哉」
……「海」を「河」に置き代えよう。「春の河終日のたりのたり哉」まさに隅田かながそうであつた。おりから水は上げ潮で河幅一杯に満々と、妊婦の腹のように膨れていた。荷足、帆船、櫂小船かいこぶね、水の面おもてにちらばっていた。兩岸の家並が水に映り、そこだけ影がついて

いた。

「いい景色、嬉しいわね」お色は恍惚うつとりと河を見た。「まるでお湯のように見えるじゃないの」——嬉しい時には何も彼も、水さえ湯のように見えるものであった。「おや都鳥が浮いているよ。可愛いわねえ、有難うよ」またお色は礼をいった。嬉しい時には有難く、有難い時には礼をいう。これは大変自然であった。そこでお色は橋を越した。まだ広小路は午おひるまえ前のことであんまり人が出ていなかった。それがまたお色には嬉しかった。芝居、見世物の小屋掛けからは、稽古囃しが聞こえて来た。

横そへ外れると半太夫茶屋で、ヒラリと洩染めの暖簾のれんを潜った。

「おやお色さん、早々と」女将おかみが驚いて顔を長くした。眉を落とした中年増唇ちゆうとどしまから真っ白い歯を見せた。

「さあお通り。……後からだろうね？」

ヒョイと母指おやゆびを出して見せた。

「私今日は嬉しいのよ」お色はトンと店へ上がった。

「そうだろうね。嬉しそうだよ」

「うんとご馳走を食べるよ」

「家の肴うちで間に合うかしら」

「そうして今日は三味線をひくわ」

「一の糸でも切るがいいよ。身受けされるっていうじやあないか」

「その身受けが助かったのよ」

いつもの部屋へ通つて行つた。ちんまりと坐つて考え込んだ。

「私あの人を嘗なめ殺してやるわ」

恐ろしいことを考え出した。

「逢い戻り！ いいわねえ」——いいことばかりが考えられた。「初めてあの人と逢うよ
うだわ」自分で自分の胸を抱いた。ちようどあの人に抱かれたように。「だが何んだか心
配だわ」今度は少し心配になった。「あの人何んておっしゃるだろう」これはちよつと問
題であつた。「のつげに私はこういうわ。もういいのよ。済んだのよ。お妾めかけに行かなくつ
てもいいのだわ」するとあの人おっしゃるかも知れない。「お色、大變氣の毒だが、おれ
には他に情婦おんなが出来たよ」……厭だわねえ、困つちまうわ。彼女は本当に困つたように部
屋の中をウロウロ見た。「おやこの部屋は四畳半だわ」毎々通る部屋なのに、彼女は初め
て気が附いたらしい。「ああでもない四畳半！ いいわねえ。嬉しいわ」嬉しい方へ考

えることにした。

「でも随分待たせるわねえ」

まだ十分しか待たないのに。

床に海棠かいどうがいてあつた。春山の半折はんせつが懸かつていた。残鶯ざんおうの啼音なきねが聞こえて来

た。次の部屋で足音がした。

「いらつしやつたか、やつとのこと」彼女は急いで居住居を直した。だが足音は引つ返した。

「莫迦まがにしているよ。人違いだわ」彼女はだんだん不機嫌ふきげんになつた。

長いこと待たなければならなかつた。女中が茶を淹いれて持つて来た。

でもとうとうやつて来た。弓之助でなくて喜介であつた。

「どうもお色さんいけません。昨日お出かけになつたまま、今日まだお帰りにならないそ
うで」

喜介の報告しらせはこうであつた。お色は一時に氣抜けした。じつと首をうな垂れた。

両国橋の乞食の群

女将おかみが声を掛けたのに、ろくろく返事をしようともせず、お色はフラリと茶屋を出た。同じ道を帰って行った。

「案じた通りだ、出来たんだわ、ええそうよ、ほかに女が」まず彼女はこう思った。「そういうものだわ。男というものは」別れ話を持ち出したのが、彼女自身だということを、彼女はここで忘れていた。

「何んだか眼の前が真つ暗になったわ」両国橋へ差しかかった。橋の欄干へ身をもたせた。「河なものかまるで溜ためだわ……！」隅田川の風景も、もう彼女には他人であった。「きつと河は深いんだろねえ」ゾツとするようなことを考えた。「身を投げたらどうだろう？」死んでからのことが考えられた。「あの人泣いてくれるかしら？」決して泣くまいと決めてしまった。「では随分つまらないわねえ」手頼たよりなくてならなかった。

「ドボーンと妾わたしが身を投げたら、誰か助けてくれるかしら。そうよ今は昼だから。助けてくれたその人が、あの方だったらいいのにねえ」

ダラリと袖を欄干へ垂らし、ぼんやり河かわ面を眺めやった。やはり都鳥が浮かんでいた。

やはり舟がとおつていた。皆々他人であつた。急に眼頭がむず痒くなつた。眼尻がわかに熱を持つて来た。ボツと両の眼が霞んで来た。瞳へ紗でも張られたようであつた。家々の形がひん曲がつて見えた。見える物がみんな遠く見えた。そうしてみんな」は底本では「そうしてみんな」濡れて見えた。

涙を透して見る時は、すべてそんなように見えるものであつた。

体の筋でも抜かれたように、グンニヤリとした歩き方で、お色は橋を向こうへ越した。すぐ人波に渦き込まれた。

お色の倚つていた欄干から、二間ほど離れた一所に、五、六人の乞食が集つていた。往来の人の袖に縋り、憐愍を乞う輩であつた。

一個の手ごろの四角い石と、十個の小さい円石とで、一人の乞食が変なことをしていた。やや離れた欄干に寄り、それを見ている老武士があつた。編笠で顔を隠しているので何者であるかは解らなかつた。

乞食は角石を右手へ置いた。それから小石を三個だけ、その左手へタラタラと並べた。老武士が口の中で呟いた。

「銅銭会茶碗陣、その変格の石礫陣。……うむ、今のは争鬪陣だ」

乞食はバラバラと石を崩した。角石をまたも右手へ置き、その左手へ二つの小石を、少し斜めにピツタリと据えた。それから指で二の字を描いた。

と、老武士は口の中でいった。「雙龍玉を争うの陣だ」

すると塊かたまっていた数人の乞食の、その一人が手を延ばし、ツと一つの小石を取った。それを唇へ持つて行つた。それから以前の場所へ置いた。他の乞食が同じことをした。次々に小石を取り上げた。それを唇へ持つて行つた。それから以前の場所へ置いた。「茶を喫する」という意味なのだ」老武士は口の中で呟いた。「雙龍玉を争うにより、その争闘に加わるよう。よろしいといつて承知した意味だ。ふむ、何かやると見える」

乞食は手早く石を崩した。小石ばかりを三個並べた。その後へ二つ円を描いた。

「ははあ同勢三百人か」口の中で老武士はいった。

乞食はまたも石を崩した。角石を取つて右手へ置いた。一個の小石を左手へ置いた。その左手へ四個の小石を、四角形に置き並べた。そうして四角形の石の周囲へ、指で四角の線を引きいた。

と、老武士は呟いた。「これ患難相扶陣だ。今度の争闘は患難だによって、相扶けよ」といふ意味だ」

乞食はまたも石を崩した。それから再び石を並べた。三個の小石を左手に並べ、三個の小石を右手へ並べた。中央へ二個の小石を置いた。

「これすなわち梅花陣だ」

周易の名家加藤左伝次

乞食は左右の手を延ばし、左右六個の石を取った。

「ははあ、花だけ残したな」

急に乞食は二個の小石へ、さらに一個の石を加えた。その左右に三個ずつ六個の小石を置き並べた。

「これはほかならぬ河川陣だ」
かせんじん

乞食はまたもや石を崩した。十個の小石を一列に並べた。その中央へ角石を置いた。

「これはほかならぬ門陣。戸という文字を暗示したものだ。三つを合わせると花川戸。はあこれは地名だな」

乞食はまたも石を崩した。小石を五個一列に並べた。そうして指で「刻」の字を書いた。「うん、これは五更ごこうという意味だ」老武士は口の中で呟いた。

乞食の石芸はこれで終った。人の往来が劇はげしくなった。乞食達は袖へ縋り出した。いつの間にか皆見えなくなった。

老武士は悠然と欄干を離れた。橋の袂に駕籠屋がいた。

「駕籠屋」と老武士はさし招いた。「数寄屋橋すきやばしまでやってくれ。うむ、行く先は北町奉行所」

すぐに駕籠は走り出した。

お色は俯向いて歩いていた。顔を上げると屋敷があつた。門に看板が上がっていた。地じ泰天たいてんの卦面けめんを上部に描き、周易活断、續善堂、加藤左伝次と記されてあつた。

当時易学で名高かつたのは、新井白峨と平沢左内、加藤左伝次は左内の高弟、師に譲らずと称されていた。左内の専門は人相であつたが、左伝次の専門は易断であつた。百発百中と称されていた。

お色は思わず足を止めた。

「あのお方のお心持ち、ちよつと占つて貰おうかしら？」

で門内へはいつていった。すぐ溜り場へ通された。五、六人の人が待っていた。一人一人奥へ呼び込まれた。嬉しそうな顔、悲しそうな顔、いろいろの顔をして戻つて来た。やがてお色の番が来た。お色は奥の部屋へ行つた。部屋の正面に床の間があつた。脇床の違ちがい棚に積まれてゐるのは、帙ちつにゆう入の古書や巻軸であつた。白熊の毛皮が敷いてあつた。

その上に端然と坐つてゐるのは、三十四、五の人物であつた。総髪そうがみの裾が両肩の上に、ゆるやかに波を打つてゐた。その顔色は陶器のようで、ひどく冷たくて蒼白かつた。眼の形は鮠はやのようであつた。眼尻が長く切れてゐた。耳鬚みみたぶへまで届きそうであつた。その左の目の瞳に近く、ポツツリ星がはいつてゐた。それが変に気味悪かつた。黒塗りの見台が置いてあつた。算木さんぎ、筮ぜいちく竹が載せてあつた。その人物が左伝次であつた。茶無地の被布を纏つてゐた。

お色は何がなしにゾツとした。凄気が逼るような気持ちがあつた。遠く離れて膝を突いた。それからうやうやしく辞儀をした。

と、左伝次は頤あごをしやくつた。

「恋だな、お娘あたご中つたらう？」

「えっ」とお色は度胆を抜かれた。

「もっとお進み、見てあげよう」左伝次の声は乾いていた。枯れ葉が風に鳴るようであった。やはり変に不気味であった。「年は幾歳いくつだ、男の年は？」

「は、はい、年は二十三で」

「妻はあるかな、その男には？」

「いえ、奥様はございません」

「ナニ、奥様？ うむそうか。相当家柄の侍だな？」

「旗本衆のご次男様で」つい釣り込まれていつてしまった。

「で、何を見るのかな？」

「はい、そのお方のお心持ちが……」緒くなつていい淀んだ。

「変わったか変わらないか見るのであろう？」

「は、はい、さようでございます」

「よし」というと箆竹を握った。「よいか、見る人と見られる人との精神が合盟一致した時、易というものは的中する。で、お前さんも一生懸命におなり」

お色は形を改めた。

「ヤ——ツ」と鋭い掛け声が、左伝次の口から迸り出た。ほとぼし「ヤーツ、ヤーツ、ヤーツ、ヤーツ」ドン底へしみるような声であった。左伝次の額からは汗が流れた。ザラザラザラザラと笹竹が鳴った。

お色は心が恍惚うっとりとなつた。これまでも易は見て貰つたが、こんな凄じすさまい立てかたは、一度も経験したことがなかつた。「さすがは名題の加藤先生。ああこの易はきつと中る」お色は突嗟に信じてしまった。

左伝次は笹竹を額へあてた。パチパチパチパチ。パチパチパチパチ。力をこめて刎はね上げた。と、算木へ手を掛けた。カタカタと算木が返された。ホーツと一つ呼吸いきをすると、ザラザラと笹竹を筒の中へ入れた。それから算木を睨み付けた。

お色は思わず呼吸を呑んだ。

死中ただ一活路

「おお、お娘ご、これはいけない」気の毒そうに左伝次はいった。

「あのそれではそのお方の、お心持ちが変わったので？」お色はブルブルと顫ふるえ出した。

「いや心は変わっていない。……もつと大変なことがある」

「え、そうして大変とは？」

「死地にはいつておられるのだ」

「まあ」と叫ぶとフラフラと立ったが、すぐベツタリと坐ってしまった。

「では、お命があぶないので？」

「うむ」と左伝次は顔を曇らせ、「しかもそれが冤えんざい罪ざいでな」

「どこにおられるのでございましょう？」

「さあ、そこまでは解らない」左伝次はお色を刺すように見た。「だがただ一つ道がある。

そうだその人を救う道がな」

「どうぞお聞かせくださいまし」お色はズルズルと膝を進めた。「先生お願いでございま

す」

「医は肉体やまいの病なほを癒し、易は精神の病を癒す。いわばどっちも仁術だ。わしの力で出来るだけの事は骨を折ってしてあげよう。その人を救う唯一の道とは、その人と一番親しい人がさらに他の人に正直に事情を話して救いを乞う時、事情を話されたその人が、事件を解

決して救うというのだ。易おもての面に現われている。詳しく分解して話してもよいが専門の言葉で説明しても、お前さんには解るまい。ところでその人と親しい人とは、今の場合お前さんだ。さらに他の人とは誰のことか。これはどうやらわらしい。そこでお前さんが正直に今度の事情をわしに話したら、あるいはこのわしがその人を、救い出すことが出来るかも知れない。もちろん確実たしかとはいわれないがな」

「はい有難う存じます。それではお話しいたします。どうぞお聞きくださいませ。あの妾わたしは浅草の、銀杏茶屋のお色でございます」

——それから田沼に懇望され、その妾めかけになろうとしたこと、可愛い恋人と切れたこと、妾めかけになることが止めになったこと、今日呼び出しを掛けたところ、恋人が昨日屋敷を出たきり、今に帰って来ないこと——一切合切打ち明けた。

左伝次は黙って聞いていたが、その顔には曖昧な、混乱したものが現われた。

「その人の名は何んというな？」やがて左伝次はこう訊いた。

「白旗弓之助様と申します」

「うむ、お旗本で白旗か……。小左衛門殿のご縁辺かな？」

「そのお方のご次男様で」

「では確か北お町奉行、曲淵様とはご親戚のはずだが」

「はい叔父甥の仲だそうで」

左伝次はじつと考え込んだ。「昨日から行方が不明なのだな？」

「はいさようでございます」

ここで左伝次はまた考えた。

「弓之助殿のご様子は？ つまり容貌風采だな」

「色白の細ほそ面おもて、中肉ちゆうぜい中身長ちゆうぜいでございます」

「うむ、そうして腰の物は？」

「あの細身の蟬鞆の大小……」

「うむ、そうしてご定紋は？」

「はい丸に蔦つたの葉で」

すると左伝次はヒョイと立った。

「お色殿ちよつとこつちへおいで」

障子を開けると縁へ出た。

午後の陽が中庭にあたっていた。

お色は相手の氣勢に引かれ、立つてその後へ従った。

縁は廻廊をなしていた。その外れに離れ座敷があった。不思議なことには、昼だというのに、雨戸がピツタリ閉まっていた。離れ座敷の前までゆくと、左伝次は入り口の戸を開けた。最初の部屋は暗かった。間の襖あいをサラリと開けた。

その部屋には燈ともしび火があつた。行燈あんどんがボツと点っていた。

途方もねえ目違いさ

一人の武士が四筋の鎖で、がんじがら拵からみに拵からめられていた。畳の上に転がっていた。それを五人の異形の男女が、真ん中にしてとりま囲繞ましていた。一人は僧侶一人は六部、一人は遊び人、一人は武士もう一人は振り袖の娘であつた。娘は胡坐あぐらを搔かいていた。そうして弓の折れを持つていた。

左伝次とお色の姿を見ると彼らは一斉に顔を上げた。

と、左伝次はお色へいった。

「お色殿、この方かね」搦められた武士を指さした。

ヒヨイとその武士が顔を上げた。お色はやにわに、^{すが}縋り付いた。

「弓様！ 弓様！ お色でございます！」ひとしきり部屋の中は静かであった。白旗弓之助はお色を見た。

「お色ではないか、どうして来た」驚いたような声であった。

「神道の兄貴、どうしたんだい？」

ややあつて娘が——女勘助が、変な顔をして声を掛けた。

すると左伝次は苦笑いをした。

「飛んだ人違いだ。偉いことをやった。おいおい早く鎖を解きねえ」

鼠小僧外伝が、ガラガラと鎖を解き放した。と鎖は柱の中へ、^{たぐ}手繰られたように飛び込んで行った。

「おい貴様達、謝まつてしまえ。詳しい話はそれからだ」易学の大家加藤左伝次、本名神道徳次郎はピタリと畳へ端坐した。それから両手を膝の前へ突いた。

「いや、白旗弓之助様、とんだ粗忽^{そこつ}を致しました。まずお許しくださいますよう」恐縮し切つて辞儀をした。

「おいおい貴様達このお方はな、お旗本白旗小左衛門様の、ご次男にあたられる弓之助様だ、曲淵様の甥ごだよ」

「へえ」と五人は後へいざつた。

「銅銭会員じゃあなかつたのか？」火柱夜叉丸が眼を丸くした。

「うん、途方もねえ目違いさ」

「だが、それにしてはなんのために、昨夜ゆうべここへ忍んだんだろう？」女勘助が疑がわしそうにいった。

「そうだ、そいつがわからねえ」稲葉小僧新助がいった。

「おれはどうでもこのお侍は、銅銭会員だと思うがな」鼠小僧外伝がいった。「そうでなかつたら責められないうちにそいつを弁解するはずだが」紫紐丹左衛門は腕を組んだ。

「本当にそうだ、そいつが解らねえ。そいつをハッキリいつてさえくれたらおれたち殴るんじゃあなかつたのに」弓の折れを指先で廻しながら、女勘助は眼を光らせた。

「いや、いずれその事については、白旗様からいい訳があるう。とにかくおれの見たところでは、銅銭会員じゃあなさそうだ」神道徳次郎はいい切った。

「さて白旗弓之助様、昨夜はどういう覚し召しで、ここへお忍びなされましたな？」

「それよりおれには聞きたいことがある。部屋の四隅の柱から、四本の鎖が飛び出して来たが、あれはなんという兵法だな？」これが弓之助の言葉であった。

六人の者は眼を見合させた。

「おい兄貴迂散うさんだぜ」女勘助が怒るようにいった。「肝腎のいい訳をしねえじゃあねえか」「待て待て」と徳次郎は叱るように。

「宝山流の振り杖から、私が考案致しました。捕り方の一手でございますよ」

「あれにはおれも降参したよ」弓之助は妙な苦笑いをした。「人間が斬ってかかったのなら、大して引けも取らないが、どうもね、鎖じゃあ相手にならねえ。……そこでもう一つ訊くことがある。紙に書かれた『川大丁首』いったいこいつはどういう意味だ？」

「それがおわかりになりませんか？」徳次郎は、いくらか探るように訊いた。

銅銭会縁起録内容

「随分考えたが解らなかつた」弓之助はまたも苦笑をし、「そこにおいで的女勘助殿に、

痛しめられている間中、その事ばかりを考えていたが、無学のおれには解らなかつたよ」女勘助をジロリと見た。

女勘助は横を向き、プツと口をとがらせた。

「それで初めてあなた様が、銅銭会員でないことが、ハッキリ証拠立てられました」徳次郎は一つ頷いたが、

「あれは隠語でございます。銅銭会の隠語なので。「順天行道」と申しますそれで。天にしたが順つて道を行なう。こういう意味だそうですでございます。つまり彼らの標語なので。「関かんを開ひらき路みち現あらわす」こんな標語もでございます。そうしてこれを隠語で記せば「並へい井せい足そく玉ぎよく」となりますそうで」

「ははあなるほど、そうであつたか。扇を取つたりつくり旁を取つたり、色々にして造つた字だな。いかさまこれでは解らないはずだ」

「さてそこで白旗様、どうして昨夜はこの屋敷へ、忍び込まれたのでございますかな？」するとクルリと弓之助は、女勘助の方へ体を向けた。

「おい勘助、偉いことをやったな。森の中でよ、社の森で」

「えっ」と勘助は胸をそ反らせた。「へえ、お前さんご存知で？」

「あんまり見事な業わざだったので、後からこつそり尾行つげて来た奴やつさ」

「あつ、さようでございましたか」女勘助は手を拍たたった。「そこでこの屋敷へ忍び込んだので？」

「そうさ天明の六人男、そいつがみんな揃そろったとあつては、ちよつと様子も見たいからな」
「ああこれで胸に落ちた」こう紫紐丹左衛門がいった。

北町奉行所の役宅であつた。

その一室に坐まつているのは、奉行曲淵甲斐守であつた。銅銭会縁起録が開かれたまま、膝の上に乗まつていた。

「往おう昔せき福建省福州府、浦田ほだ県九連山山中に、少林寺と称する大寺あり。堂塔伽藍がらん樹間に聳え、人をして崇敬せしむるものあり。達尊たつそん爺んや々の創建せるも技一千数百年の星霜を經。僧侶数百の武に長じ、軍略劍法方術に達す。

康こう帝ていの治世ちせいに西蔵ちべつ叛はんす。官軍ことごとく撃退さる。由よつて皇帝諸国に令し、賊滅するものを求めしむ。少林寺の豪僧百二十八人、招に応じて難おむむに赴おもむく。国境に至りて大いに戦い、敵国をして降を乞こわしむ。皇帝喜び賞を与え僧を少林寺に帰さんとす。隆りゅう文もん耀よう、

張近秋、二人の大官皇帝に讒し、少林寺の僧を殺さしむ。

兵を発して少林寺を焼く、蔡徳忠、方大洪、馬超興、胡徳帝、李式開の五人の僧、兵燹をのがれて諸国を流浪し同志を語らい復讐に努む。すなわち清朝を仆さんとするなり。この結社を三合会また一名銅銭会と称す」

これがきわめて簡単な、銅銭会の縁起であつて、今日に至るまでの紆余曲折が詳しく書物には記されてあつた。

「公所（大結社）」のことや「会員」のことや「入会式」のことや「誓詞」のことや「諸律法」のことや「十禁」の事や「十刑」の事や「会員証」のことや「造字」のことや「隠語」のことや「符牒」のことや「事業」の事や「海外における活動」のことについても、かなり詳しく記されてあつた。

しかし、將軍家紛失に關しての、暗示らしいものは記されてなかつた。

とまれ非常な大結社で、支那の政治にも戦争にも、また外交の方面にも、偉大な潜勢力を持つてゐることが、記録によつて窺われた。のみならず印度や南洋にある、百万近くの支那人のうち、過半以上は会員として、働いてゐることも記されてあつた。

それと同時に会員のうちには、不良分子も潜在してゐて、悪いことをしてゐるといふこ

とも、支那人以外にも会員があつて、氣脈を通じているということも、相当詳しく記されてあつた。

京師殿と甲斐守

「恐らく今度の事件なるものは、日本における会員の、不良分子の所業しわざであろうが、どういふ径路で將軍家をどうして奪つたかわからない。どこに將軍家を隠しているか、それとも無慚しんに弑ころしたか、これでは一向見当が付かない。……一人でもよいから銅錢会員をどうともして至急捕えたいものだ」

甲斐守は沈吟した。

その時近習がはいつて来た。

「京師殿と仰せられるご老人が、お目にかかりたいと申しまして……」

「何、京師殿、それはそれは。叮嚀ていねいにここへお通し申せ」

近習と引き違ひにはいつて来たのは、両国橋にいた老人であつた。

「おおこれは京師殿」

「甲斐守殿、いつもご健勝で」

二人は叮嚀に会釈した。

「さて」と京師殿は話し出した。「銅銭会の会員ども、今夜騒動を始めますぞ」

「何？」と甲斐守は膝を進めた。「銅銭会の会員がな？　してどこで？　どんな騒動を？」

「今夜五更花川戸に集まり、ある家を襲うということでござる。同勢おおかた三百人」

両国橋での出来事を、かいつまんで京師殿は物語った。

「銅銭会員にご用ござらば、即刻大至急にご手配なされ、一網打尽になさるがよかろう」

「よい事をお聞かせくださいました。至急手配を致しますよう」

「何か柳営に大事件が、勃発したようでございますな」

「さよう、非常な大事件でござる。実は一昨夜上様が……」

「いやいや」と京師殿は手を振った。

「愚老は浮世を捨てた身分、直接柳営に関することは、どうぞお聞かせくださらぬよう」

「いかさまこれはごもつともでござる」

そこで甲斐守は沈黙した。

間もなく京師殿は飄然と去った。

さてその夜のことであつた。

花川戸一帯を修羅場とし、奇怪な捕り物が行われた。

歴史の表には記されていないが、柳營秘録には相当詳しく記されてあるに相違ない、この捕り物があつたがため幕府の政治が一変し、奢侈しゃしげ下剋上げくじょうの風習が、勤儉質素尚武となり、幕府瓦壞の運命を、その後も長く持ちこたえたのであつた。

この捕り物での特徴は、捕られる方でも、捕る方でも、一言も言葉を掛け合わなかつたことで、八百人あまりの大人数が、長い間格闘をしながらも、花川戸一帯の人達は、ほとんど知らずにおわつてしまった。しかも内容の重大な点では、慶安年間由井正雪が、ひと計つて徳川の社しゃ稷しよくに、大鉄槌を下そうとした、それにも増したものであつた。捕り方の人数六百人！ この一事だけでも捕り物の、いかに大袈裟なものであり、いかに大事件であつたかが、想像されるではあるまいか。一口にいえば銅銭会員と幕府の捕り方との格闘なのであつた。

その夜はどんよりと曇つていた。月もなければ星もなかつた。家々では悉く戸を閉ざし、大江戸一円静まり返り燈火ともしび一つ見えなかつた。

と、闇から生まれたように、浅草花川戸のひとところ所に、十人の人影が現われた。一人の人間を真ん中に包み丸く塊かたまって進んで来た。一軒の屋敷の前まで来た。黒板塀がかかっていた。門がピツタリ閉ざされていた。屋根の上に灰ほのぼの々と、綿のようなものが集まっていたがどうやら八重桜の花らしい。

その前で彼らは立ち止まった。

とまた十人の一団が一人の人間を真ん中に包み、闇の中から産まれ出た。それが屋敷へ近付いて来た。先に現われた一団と後から現われた一団とは、屋敷の門前で一緒になった。互いに何か囁き合った。わけのわからない言葉であった。

慶安以来の大捕り物

「背うしろに幾多いくたの宝玉ありや？」

「二百八」

「途上虎あり、いかにして来たれる？」

「我すでに地神に請えり、全国通過を許されたり」

「汝橋を過ぎたるや否や？」

「我過ぎたり矣」

「いづれの橋ぞ？」

「二板の橋」

「これすなわち二板橋、何ゆえに二板の橋というや？」

「明末みんまつに清しんこれを毀こぼち、なおいまだ修せられず」

「何んの木の橋ぞ？」

「否々これ樹板にあらず、左は黄銅、右は鉄板」

「誰かこれを造れるものぞ？」

「朱開、及び朱光の徒」

「二板橋の起原如何？」

「少林寺ふんしやう焚しょう焼しょうされ、五祖叛迷者に傷しょうがい害がいされんとするや、達尊たつそん爺や々や驗けんを現いまわし、黄

雲うんを変かじて黄銅わんどうとなし黒雲くろうんを変かじて鉄てつとなす」

こんな塩梅あんばいの言葉であつた。はたして会員か会員でないかを、問答によつて確かめた

のであった。またも人影が産まれ出た。同じような陣形であった。門前で問答が行われた。続々人影が現われた。みんな門前へ集まって来た。そのつど問答が行われた。

銅銭会員三百人が、すっかり門前へ集まったのであった。

と、五、六人の人影が、スルスルと塀の上へ上って行った。音もなく門内へ飛び下りた。門を開けようとするのであろう。だが門は開かなかつた。そうして物音もしなかつた。人は帰って来なかつた。何んの音沙汰もしなかつた。

いつまでも寂然と静かであった。

十人の人影が塀を上った。それから向こうへ飛び下りた。何んの物音も聞こえなかつた。そうして門は開かなかつた。十人の者は帰って来なかつた。何んの音沙汰もしなかつた。いつまでも寂然と静かであった。

銅銭会員は動揺し出した。口を寄せ合つて囁いた。ささや

「敵に用意があるらしい」不安そうに一人がいった。

「殺されたのか？ 生擒いけどられたのか？」

「どうして声を立てないのだろう？」

彼らの団結は崩れかかつた。右往左往に歩き出した。

「門を破れ。押し込んで行け」

「いや今夜は引つ返したがいい」

彼らの囁やきは葉擦れのようであった。

「あつ！」と一人が絶叫した。「あの人数は？ 包囲された！」

まさしくそれに相違なかった。往来の前後に黒々と、数百の人数が屯ろしていた。隅田川には人を乗せた、無数の小舟が浮かんでいた。露路という露路、小路という小路、ビツシリ人で一杯であった。捕り方の人数に相違なかった。騎馬の者、徒歩かちの者、……八州の捕り方が向かったのであった。

銅銭会員は一団となった。やがて十人ずつ分解された。そうして前後の捕り方に向かった。

こうして格闘が行われた。

全く無言の格闘であった。だがどうい理由からであろう？

官の方からいう時は、御用提燈ごようちようちんを振り翳かざしたり、御用の声を響かせたりして、市民の眼を覚ますことを、極端に恐れ遠慮したからであった。捕り物の真相が伝わったなら、

——すなわち將軍家紛失の、その真相が伝わったなら、どんな騒動が起こるかも知れない。

それを非常に案じたからであつた。

だがどうして銅銭会員は悲鳴呶号しなかつたのであろう？ それは彼らの「十禁」のうち、こういうことがあるからであつた。

「究極において悲鳴すべからず。これに叛くものは九指を折らる」

九指とは九族の謂であつた。

春の闇夜を数時間に渡つて、無言の格闘が行われた。

その結果は意外であつた。銅銭会員は全部死んだ。すなわちある者は舌を噛み、またある者は水に投じ、さらにある者は斬り死にをした。

将軍家柳營へ帰る

この間も屋敷の表門は、鎖されたまま開かなかつた。

捕り物がすっかり片付いた時、始めて門はひらかれた。

驚くべき光景がそこにあつた。銅銭会員十六人が、髪縄で絞首されていた。髪縄の一端

には分銅があり、他の一端は門の柱の、刳り穴の中に没していた。

十六人のうち三人が、辛うじて蘇生をすることが出来た。その三人の白状によって、事件の真相が明瞭になった。

その夜の暁千代田城内には、驚くべき愉快な出来事があった。いつもの將軍家の寢室に、紛失したはずの將軍家が、ひどく健康じょうふく そうな顔色をして、グツスリ寝込んでいたものである。

眼を覚ますと家治はいった。

「おれはうんと書物ほんを読んだよ。實際浮世にはいい書物ほんがあるなあ。はじめておれは眼が覚めたよ。さてこれからは改革だ。政治の改革、社会の改革、暮しいい浮世にしなければならぬ」

「しかし上様には今日まで、どこにおいてでございましたな？」老中水野忠友が聞いた。

「うん、越中の屋敷にいたよ」

「はあ松平越中守様の？」

「うん、そうだよ、越中の屋敷に」

「どうしてどこからお出いでになりました？」

「それがな、本当に変へんてこ挺ていだったよ。おれが後苑を歩いていると、素的な別嬪が手招きしたもののさ。でおれは従ついて行つた。すると大奥と天主台の間に嚴封をした井戸があろう。非常な場合に開くようにと、東照神君から遺言された井戸だ。そこまで行くとその別嬪が、蓋を取つてヒヨイとはいつた。オヤとおれは驚いて、井戸を覗くと縄梯子がある。井戸ではなくて間道だったのさ。こいつ面白いと思つたので梯子を伝わつて下りたものさ。すると底に女がいた。それから五人の男がいた。六部と破落戸ごろつきと売卜者ばいぼくしゃと、武士さむらいと坊主とがいたつてわけだ。すぐにおれは取つ掴まつてしまった。でおれは仰天して助けてくれーツと叫んだものさ。だがすぐ猿轡ざるぐつわを箠はめられてしまった。そうしてどうとう引つ担がれてしまった。長い間横穴を走つたつけ。それでもどうとう外へ出たよ。駕籠が一挺置いてあつた。いやどうもそれが穢きたない駕籠でな、おれは産まれて初めて乗つたよ。下ろされた処ところに屋敷があつた。黒板塀に門があつて、八重桜の花が咲いていたつけ。そこで休憩したもののさ。一杯お茶を貰つたが、ひどく咽喉が乾いていたので、途方途徹もなくうまかつた。そこでまた駕籠へ乗せられたものさ。今度は立派な駕籠だった。大名の乗る駕籠だった。そうして武士どもが三十人も、駕籠のまわりを警護してくれた。でようやく安心したもののさ。着いた所が越中の屋敷だ。あの真面目まじめの越中めが、いよいよ真面目の顔をして『上様

ようこそ渡らせられました。いざいざ奥へお通り遊ばせ』こういった時にはおれは怒った。『越中！ お前の指さしがね金だな！』すると越中めこういいおった。『上様のお命をお助けしたく、お連れ致しましてございます』とな。そこでおれは怒鳴ってやった。『誰かこのおれを殺そうとするのか？』

『はい上様の寵臣が、ある結社を味方とし、上様を狙っておりますので』

『それでお前が助けたというのか？』

『毒を制するに毒をもつてし、ある六人の悪漢を手なずけ、お連れ申しましてございます』
——で、おれは黙ってしまった。そうして奥座敷へ通って行った。そこに彦太郎がいるじやあないか。三河風土記を読んでくれた、近習の中山彦太郎がな。おれはすっかり喜んでしまった。風土記の続きが聞きたかったからさ。『おい彦太郎風土記を読め』おれは早速いったものさ。そこで彦太郎め読んでくれたよ』

嬉しい再会

「三河風土記ばかりではなかった。いろいろの書物ほんを読んできたよ。間々あいだあいだ間々には越中めが、世間話をしてくれたつけ。わしはすっかり吃驚びつくりしてしまった。ひどく浮世はセチ辛いそうだな。町人や百姓や武士までが、わしを怨んでいるそうだな。うん、越中めがそういつてたよ。わしは最初は疑がったが、しかししまいには信じてしまった。そこでおれは決心したよ。これまでおれを盲目めくらあつかいにした、悪い家来めを遠ざけて、越中を代わりに据えようとな。……で、ともかくもそんな塩梅あんばいで、今朝までおれは越中の屋敷で、暮らしていたというものさ。その今朝越中がこんなことをいった。『結社は退治られてしまいました。もはや安全でございます。お城へお帰り遊ばしませ』そこでまたもや駕籠へ乗り、以前の道を帰って来たのさ……。さあ改革だ！ 建て直しだ。いい政事まつりごとをしなければならぬ」

だが不幸にも家治將軍は、その後間もなく逝せい去きよした。田沼主殿頭が薬師くすりしをして、毒を盛らせたということであるが、真相は今にわからない。

しかし家治の遺志なるものは、幸い実行することが出来た。家治の死後電光石火に、幕府の改革が行われ、田沼主殿頭は失脚し、大封を削られて一万石の、小大名の身分に落とされてしまった。代わって出たのが松平越中守で、老中筆頭の位置に坐り、寛政の治を行

うことになった。

青葉の季節が訪ずれて来た。

半太夫茶屋の四畳半で、愉快的な嬉あいびき曳びきが行われていた。

弓之助とお色との嬉あいびき曳びきであった。

「おいお色、おい女丈夫、お前は命の恩人だぜ」

「そう思ったら邪魔にせずに、精せいぜい々ぜいこれから可愛あいがるといいわ」

「あの時お前が来なかつたものなら、女勘助っていう奴に、おれはそれこそ殺されたかもしれねえ」

「ご身分なを宣のたまればよござんしたに」

「莫迦まがめ、そんなことは出来るものか、がんじがら搦らみにされたんだからなあ。おめおめ生け捕りにされた身で、名前や素姓すせいが明あされるものか」

「ほんとにそれはそうですわねえ」お色は胸むねに落ちたらしい。

金魚売りの声こゑが表うらを通とほつた。燕つばきのさえずりが空そらで聞きここえた。

「六人の奴らどうしたかな？」

ふと弓之助は壊しそうにいった。「江戸にはいないということだが」

「泥棒なんて厭ですわねえ」お色は眉間へ皺を寄せた。

「それもご治世が悪かったからさ。人間いよいよ食えなくなると、どんな事でもやるものだからな」

ちよつと弓之助は感慨に耽つた。

「ご治世は変わったじやありませんか。越中守様がお乗り出しになり」

「有難いことには変わったね。これから暮らしよくなるだろう。ところでどうだいお前の心は」

「何がさ？」

とお色は怪訝けげんそうに訊いた。

「変わったかよ？　変わらないかよ？」

「そうねえ」

とお色は物憂そうにいった。「あなた、お役付きになつたんでしょう？」

「越中守様のお引き立てでね」

「権式張らなければいけないわねえ」

「へえ、そうかな、どうしてだい？」

「お役人様じゃありませんか」

「ほほうお役人というものは、権式張らなけりやあいけないのかえ」

「みんな威張るじゃありませんか」

「よし来た、それじゃあおれも威張ろう」

「では、妾わたしはさようならよ」

「おっと、おっと、どういう訳だ？」

「妾威張る人嫌だからよ」

「俺が」と弓之助はゴロリと左寝の肘を後脳へ宛あてた。「威張れるような人間なら、もつと早く役附いていたよ」

「どうしてでしょう？ 解らないわ」

「一方で威張る人間は、それ一方では諂へつらうからさ」

「ああそうね、それはそうだわ」

「おれの何より有難いのは、生地きじで仕えられるということさ。越中守様の下でなら、お太鼓を叩く必要もなければ怒ってばかりいる必要もない。楽に呼吸いきを吐けるといふものさ」

この意味はお色にはわからなかった。

「お色、久しぶりで何か弾けよ」

「ええ」といつて三味線を取った。「あら厭だ糸が切れたわ」

「三の糸だろう、薄情の証拠だ」

「お気の毒さま、一の糸よ」

「それじゃあいよいよ嬬かかあになれる」

「ゾツとするわ！ 田沼の爺じじい！」

「何さ、田沼のその位置へ、俺が坐ろうというやつよ」

「まあ」といつて三味線を置いた。

「大して嬉しくもなさそうだな」

「瞞だますと妾狂きちがい人になるわ！」

二人はそこで寄り添おうとした。有難い事には野暮天やぼてんではなかった。寄り添う代わりに坐り直した。と、お色がスツと立った。裏の障子を引き開けた。眼の前に隅田が流れていた。行き交う船！ 夕焼け水！

「ああ私にはあの水が……」湯のようだと彼女はいおうとした。だがそういわなかった。

「ああまるで火のようだわ」こう彼女はいったものである。

間もなく季節は真夏に入ろう。恋だつて火のように燃えるだろう。だがその次には秋が来よう。結構ではないか実を結ぶ季節だ。

京師殿とは何者であろう？ 結局疑問の人物であつた。あの有名な天一坊事件、その張本の山内伊賀介、その後身ではあるまいか？ 非常な学者だといふところから、特に助命して大岡家に預け、幕府執政の機関とし、捨扶持すてぶちをくれていたのかもしれない。伊賀介の元の主人といえ、京師の公卿の九条殿であつた。

青空文庫情報

底本：「銅銭会事変 短編」国枝史郎伝奇文庫27、講談社

1976（昭和51）年10月28日第1刷発行

初出：「週刊朝日 春季特別号」

1926（大正15）年4月1日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：阿和泉拓

校正：湯地光弘

2005年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銅銭会事変

国枝史郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>